



## 選考委員特別賞 リリー・フランキー賞

### おじいちゃんとわたし

北九州市立清水小学校 五年

籬生 望桜

わたしは、今、五年生です。わたしが小学生になる直前、おじいちゃんは亡くなりました。ちょっと前まで元気だったのに、ガンになってしまい、入院しました。病気を治そうとして入院したのに、ぐあいがどんどん悪くなっていききました。初めておじいちゃんの病院に行った時、すぐおどろきました。わたしが知っている病院とは違っていたからです。うす暗くて、汚くて、なんだかいやな臭いがしました。病気の時にわたしが行く子供クリニックは、いつも明るくて、いい匂いがしていました。ここにずっといなければいけないなんて、おじい

ちゃんかわいいそうだなあ、と思いました。

毎週末、わたしはお母さんに連れられて病院に行きました。そのたびに、おじいちゃんの病院がきらいになりました。そして、おじいちゃんのことだんだんときらいになっていきました。そもそも、おじいちゃんのことには、あまり好きじゃなかったのかもしれませんが。おじいちゃんが亡くなった時、最後まで涙がでませんでした。

わたしのおじいちゃんは、昭和十二年生まれ。九州男児を絵にかいたような人でした。お家にいる時のおじいちゃんは、礼儀作法にきびしい人でした。特に、食事の時。「ペチャペチャ、音をたてて食うな!」と、どなられることもありました。焼き肉を食べに行った時も、おこられて、口の中をヤケドして皮がむけました。熱々の物を食べる時は、ペチャペチャいってもいいじゃないか、むしろ、ペチャペチャいったほうが、おいしいんじゃないか、と腹がたちました。

正義感が強く、物事に真げんに取り組む人でもありました。近所の人にもしたわれて、お友だちと一緒に、

しゅ味の畑を作っていました。ある日、おじいちゃんは自分の畑に、ビーチパラソルをたてるといい出し、わたしと一緒にパラソルをたてました。畑が気になるあまり、一日中、ビーチパラソルの下で、畑を見守り続けた結果、熱中症になりかけることもありました。

そして、きちょう面な人でした。いつもおじいちゃんの部屋は、きっちり、整理整頓されていました。独自の定位置を決めているので、わたしが勝手にいじると、いつも見抜かれました。

いつもは、がん固なおじいちゃんですが、わたしと二人きりになると、ちょっぴりにこやかに変わります。整理整頓されている、おじいちゃんの机の中には、秘密のお菓子がかくされていました。おじいちゃんは、病気のため、本当はお菓子を食べてはいけません。でも、おばあちゃんには、ないしよで、こっそりかくし持っていました。わたしがおねだりすると、にっこり笑って、黄金とうをくれました。そして、おばあちゃんにばれて、いつもけんかになりました。

二人でおふろにはいる時、わたしの好きな入浴ざいを入れてくれました。入浴ざいは、あつという間に、溶けてしまいますが、「もっともっとー」とだだをこねると、わたしのために、二つ、三つといれてくれました。

おじいちゃんが、入院してからの時間は、とても長く感じました。家族もみんな、だんだんとつかれていき、わたしも病院が大きらいになりました。だけど、おじいちゃんが亡くなるのは、あつという間のことでした。ちょっと前までは、病院のベッドの上でも、元氣そうだったのに……。おしゃべりもしていたのに……。おじいちゃんは、突然いなくなっただけのような気がしました。

おじいちゃんが亡くなってから、半年がたち、初盆をむかえることになりました。前に使って、しまっておいたお盆ちょうちんを、倉庫から出しました。箱の中のお盆ちょうちんは、きれいに整理整頓されていました。コードをたばねているビニールひもの結び方に、特ちょうがありました。それを見たおばあちゃんが、「あら、

これは、おじいちゃんが整理して、かたづけたんだね。」  
といました。特ちょうのある結び方は、確かにおじい  
ちゃんのものでした。それを見た時、初めて涙が出まし  
た。おじいちゃんは、本当に亡くなってしまったんだ。  
えい遠におじいちゃんには会えないことを実感しまし  
た。悲しい気持ちで胸がいっぱいになりました。人が亡  
くなるということを初めて知りました。

「おじいちゃんは、どこへ行ったんだらうね。」とわた  
しは、おばあちゃんに聞きました。おばあちゃんは、  
「お空の上で暮らしているんだよ。」といました。お空  
の上って、どんなところだろう？わたしの大好きな絵  
本「だるまちゃんとかみなりちゃん」が頭にうかびまし  
た。かみなりちゃんを助けた、だるまちゃんが、お礼  
にかみなりの国にしようたいされるといってお話の絵本  
です。雲の上のかみなりの国は、とてもすてきな所です。  
た。おじいちゃんが暮らしているお空の上も、かみなり  
の国みたいだったらいなあ、と思いました。